

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 9 月 28 日現在

機関番号：32641

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23710319

研究課題名(和文) 新たなライフスタイル探求のための、男性性の文化変容に関する国際比較社会学的研究

研究課題名(英文) Transnational studies of men's fashion magazines from view point of content analysis

研究代表者

辻 泉 (TSUJI, Izumi)

中央大学・文学部・教授

研究者番号：00368846

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、男性ファッション誌の内容分析を行い、その実態を明らかにすることである。特に、日本の雑誌を主たる対象として、そこで描かれているジェンダーやマスキュリティ(男性性)に注目し、多角的な視点に基づいて、他国(ドイツ)の雑誌や、日本の女性向け雑誌とも比較しながら、その今日的な特徴や変遷を明らかにした。あわせて、読者層である若年男性や編集部に対する聞き取り調査も行った。

研究成果の概要(英文)：This study aims to analyze and clarify aspects of men's magazines from the viewpoint of content analysis. Specifically, the study focuses on gender and masculinity as depicted in Japanese men's fashion magazines and clarifies related features based on diverse perspectives made apparent by comparing them with men's fashion magazines from other countries and Japanese women's fashion magazines.

研究分野：社会学

キーワード：男性性 男性ファッション誌 ジェンダー メディア ドイツ社会 雑誌 ライフスタイル 内容分析

1. 研究開始当初の背景

(1)国内の研究動向

今日における男性性の文化変容は、日本国内においても少年犯罪や中高年男性の自殺といった深刻なものから、いわゆる「草食系男子」にいたるまで、様々な問題を引き起こしている。しかしながらこれまでの男性学は、ジェンダーを押し付けられたものとして告発するだけの段階、いわば男性たちを「被害者化」(バダンテール)する段階に留まってきた。

もちろん、家庭や労働における「性別役割分業」には看過できない問題が存在し、それらを告発する議論が有用な知見を蓄積してきたのは事実である。だがその一方で、男性性が一枚岩的に捉えられ、批判的な論調が多くを占めてきた。そこで本研究では、むしろポピュラー文化に注目し、その中で男性性が強く現れた事例を対象とする。

ただし予め述べておかなければ、本研究はいわゆる「バックラッシュ」と呼ばれる保守反動的な流れに与するものでは決してない。あくまで社会的な実証研究の知見に基づいて、成熟社会の新たなライフスタイルを生産的に構想していくことが最終目的であり、そのためにこそ、多くの関心を集めるポピュラー文化に注目をする。

この点で、男性向けファッション雑誌やライフスタイル雑誌(以下、男性ファッション誌)は大きく注目に値する。1976年の『POPEYE』創刊に始まり、男女雇用機会均等法直後の1986年から『Men's NON-NO』はじめ多くの雑誌が創刊され、今日に至るまでに発行点数を大きく増やしてきた。創刊時、女性ファッション誌から派生したものもあることから、ジェンダーが流動化した様子が伺えたり、逆に伝統的な男性性の強調されたものも存在するなど、まさに多様化した男性性の現状を見通すことのできる研究対象といえる。さらに数十年にも渡るバックナンバーを分析することで男性性の歴史の変遷を辿りうるという点においても、貴重な資料だといえよう。

このように、ジェンダーに関する実態把握や未来を構想していく上で、メディアの内容分析は、欠くことができない最重要課題といえる。しかし、女性ファッション誌を対象とした井上輝子や諸橋泰樹らの研究やテレビドラマなどを対象にした村松泰子の研究など、フェミニズムの視点によるいくつもの先駆的な研究が重ねられてきたのと比べると、男性性に関する研究は未だ不十分といわざるを得ない。少なくとも日本国内では、男性ファッション誌を対象とした先行研究となると、特定の雑誌の創刊の経緯を記したノンフィクション的な記録か、雑誌全般の歴史記述における一部で触れられている程度なのが現状である。

(2)国外の研究動向

男性性の変容については、コンネルやマッキネスらの議論がよく知られているが、一方で、男性ファッション誌そのものについての研究は、対象自体の新しさもあって、決して数多くはない。

その中でも貴重な成果として、ベンウェル編『Masculinity and Men's Lifestyle Magazine』を挙げることができる。欧米圏の事例を中心に、近年の男性ファッション誌の内容について、「都市的生活様式を前提に消費を称揚」しつつ、「強力なヘテロセクシヤリティが羅列」されているといった指摘がなされているが、日本の事例と比較した場合、おそらく前者は共通しつつも後者についての相違が見えてくることなどが想像されよう。

なお国外で最も注目すべきなのは、ドイツにおける男性性研究である。モッセらに代表される歴史研究には厚みがあり、中でも、後発的に近代化を成し遂げた社会においては、男性性がロマンティックで理想主義的になりやすいといった指摘は、同じ後発近代社会である日本にも参考になるところが多い。それ以外にも、ホルシュタイン著『男たちの未来 支配することなく、力強く』のような実証的な調査研究に基づく提言書が存在したり、あるいは若年層においては、女性よりも男性にこそ社会的な不適応者が多くみられるため、「男子援助活動」と呼ばれる政策が具体化されつつあることなども注目に値しよう(この点は、池谷壽夫の研究が詳しい)。

また先述の村松泰子とゴスマンとの共同研究による『メディアがつくるジェンダー 日独の男女・家族像を読みとく』は、男性性に限定したものではないが、日独比較研究の貴重な先行例といえる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、私たちの日常生活や文化が、いかにジェンダーから分かちがたく強く規定され構造化されているかという点について、徹底的に内面的な理解を積み重ね、自己反省的にとらえ返していくことにある。主たる研究対象は日本および比較対象としてのドイツの男性ファッション誌であり、要点は以下のとおりである。

第一に、男性ファッション誌の内容分析に基づく共時的な比較を通して、男性性を一枚岩的にとらえて批判するのではなく、その複数性を記述しつつ、潜在的な可能性を明るみに出すということ。

第二に、その複数性に留意したままに、経時的比較分析から歴史の変遷を詳細に記述するという点。

第三に、ドイツの事例との比較を通して有用な知見やヒントを得ること。

第四に、これらの知見を総合し、これからの日本社会における男性性のあるべき姿を構想していくための基礎データを構築する

ということ。

そして本研究の、特色・独創的な点は以下の三点である。

第一に、日本における男性性の文化変容に関する分析としては、先駆的な試みという点である。近年、例外的に阿部・大日方・天野編『男性史1～3』というアンソロジーが出されたものの、あくまでその記述は時代や対象ごとに細切れであり、男性ファッション誌という一つの対象に着目して連続的に文化変容を描き出そうとする本研究は先駆的な試みといえる。

第二に、代表的な特定の1誌だけに限定するのではなく、同時に複数の雑誌を比較検討するのも特色である。男性性を一枚岩にとらえることなく、その多様な実態を詳細に記述しうる。

第三に、本研究が採用する分析手法もオースドックスながら、客観的かつ適切なものである。ジェンダーに関する内容分析では、どちらかといえば質的な分析に特化することが多いが(潜在的なジェンダーを明るみに出すためにはそれが当然の場合もあるが)、本研究では実証的・計量的に全体的な傾向を把握することに重きを置き、その上で質的な分析を深めることにしており、これまたより深みのある結果が期待できよう。さらにそれを読者である若年男性や編集者にフィードバックして聞き取り調査を行うことで、さらなる発見が期待できる。

3. 研究の方法

(1) 期間全体を通して

本研究では、男性ファッション誌を対象とする計量的な内容分析(とその補完としての質的な内容分析)を中心に、さらに読者層や製作者に対する聞き取り調査を行った。とりわけ内容分析については、以下の2つの観点から比較検討を深めた。

第一に共時的比較分析として、現在刊行されている日独の主要な男性ファッション誌を対象に、比較検討を行い多様な実態を明らかにした。

第二に、経時的比較分析として、特に代表的な雑誌(刊行年度の古いものや発行部数の多いものなど)を数点選定し、それらの創刊号以降のバックナンバーの内容について、時系列的に比較検討し、男性性の歴史的な変容を記述した。その際、同じくドイツとの比較や、さらに女性向け雑誌との比較を通して、特徴的な実態を明らかにした。

なお年度ごとの進捗状況は以下の通りである。

(2) 平成23年度

平成23年度は、日本およびドイツで現在刊行されている男性ファッション誌を網羅した内容分析(共時的比較分析)を中心に行い、それと同時に、主要な読者や編集部に対

する聞き取り調査、ドイツの事情に詳しい研究者からのヒアリングを予定通り行った。

まず、男性ファッション誌の内容分析(共時的比較分析)についてだが、日本およびドイツにおいて、現在刊行されている男性ファッション誌について、対象雑誌の全頁に関する内容分析を行った。ただし、データ化については、膨大な作業量となるため、1年分すべてではなく、内容面で特徴の出やすい8月号に特化しておこなった。またこれらの作業については、適宜学生アルバイトを用い、複数人のコーダーの目を通すことで、客観的な分析がなされるように心がけた。

次に、主要な読者層や編集部などに対する聞き取り調査についてだが、内容分析と平行して、男子大学生などを中心に、男性ファッション誌の購読状況や日常生活と男性性に関する聞き取り調査を行った。その際、主要な10誌を選定し、1誌あたり数名程度の対象者を選定した。

あわせてこれらの10誌については、協力の得られる限りにおいて、編集部に対しても、その製作過程や読者層の実態把握に関する聞き取り調査を行った。

またその他に、ドイツ・トリア大学大学院の博士課程のロナルド・サラディン氏より、ドイツ語雑誌の分析やドイツでの研究調査に関して具体的なアドバイスを受けた。

(3) 平成24年度

平成24年度は、ひきつづき日本およびドイツにおける男性ファッション誌に関連する実証的な調査研究を行った。昨年度の日本およびドイツにおける男性雑誌を網羅した内容分析(共時的比較分析)や、主要な読者層などへのインタビュー調査からは、これらが同種の女性向け雑誌をベースに発展してきた雑誌ジャンルであり、ジャンルの成立としては女性向け雑誌の方が古く、内容面でもそれに大きな影響を受けてきたのではないかと、という知見を得た。

そこで、まず日本社会を対象にした調査研究としては、男性雑誌に対する理解を深めるため、常にそれと比較検討することを念頭におきながら、女性向け雑誌を網羅した調査研究を行った。

具体的には、現在刊行されているものから主要なものをピックアップし、その対象雑誌の全頁に関する内容分析を行った(共時的 content analysis)。ただしデータ化については、膨大な作業量となるため、年度内の全ての号ではなく、内容面で特徴の出やすい8月号に特化して行った。あわせて、さらに主要な2誌に絞ったうえで、バックナンバーの内容分析(経時的比較分析)も行い、歴史的変遷についての理解も深めたが、いずれも内容分析のデータ化の作業に際しては複数のコーダーが作業をすることで客観性の確保に努めた。

またこれと並行して、昨年度の男性雑誌と同様に、主要な読者層や編集部などに対する

聞き取り調査も行った。

次に、ドイツ社会を対象にした調査研究としては、主要な男性雑誌数誌を対象に、バックナンバーの内容分析（経時的比較分析）を行い、昨年度の共時的比較分析の結果も参照しながら理解を深めた。その上で、3月末～4月はじめにかけて、現地訪問調査を実施し、主要な読者層である若年男性を対象に、日常生活や男性性に関する聞き取り調査を行った、いくつかの重要な知見を得た。

(4)平成25年度

平成25年度は、雑誌バックナンバーの内容分析を中心しつつ、研究成果のとりまとめを主として行った。

その中で、これまでの年度においては、相対的に個別の対象として取り上げ、分析を行ってきた、これら二種の雑誌が、互いに関連の強いものであること、また内容分析に加えて、実際の読者であったり、あるいは広く若年層を対象とした、対人コミュニケーションに関する実証的調査の結果および理論的な検討も加える必要のあること、などが明らかになった。

そこで、こうした視点から、これまでの研究成果をまとめていくと共に、国際的な比較研究を行ってきた本研究にふさわしいアウトプットとすべく、ドイツ在住の研究者（先述のロナルド・サラディン氏など）とも緊密に連携を取りながら、英語論文などの国際的な発表の機会を探ると共に、そうした成果物の作成にあたった。

しかしながら、こうした応用的な展開、および海外との連携には、予想以上の時間と手間がかかることとなり、また英語での論文執筆においても、本文や図表の作成などに、これまた予想以上の時間と手間を取られることとなったため、残念ながら、当初予定していた3年間では研究を終えることができず、引き続きもう一年間延長することとした。

(5)平成26年度

平成26年度は、これまでの成果をふまえた英語論文および学術書の執筆作業を中心に、本研究のまとめを行った。

4. 研究成果

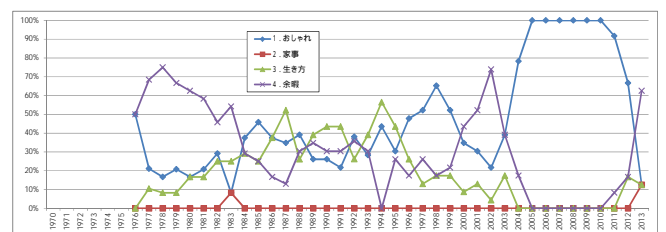
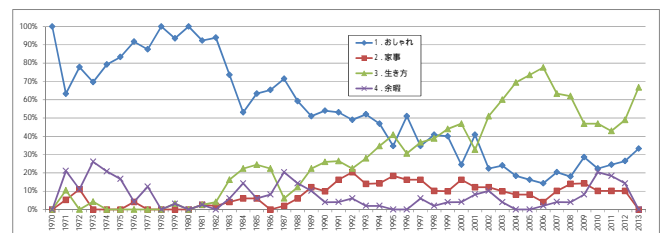
本研究における主な研究成果をまとめると以下ようになる。

第一に、雑誌の内容分析に基づく経時的な比較分析からは、高度情報消費社会化が著しく進展した1970年代以降の日本社会において、男性性も大きな変容を遂げたことが明らかになった。とりわけ、ロマンティックで理想主義的であった志向性が、徐々に（異性と

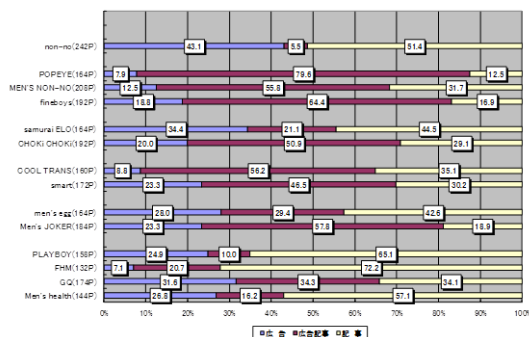
の)関係性志向など現実主義的なものへと変容してきたことが明らかになった。この点は、図表1などに現れているが、女性誌との比較からは、むしろそれを後追いするような形で変化が起こってきたということ、またドイツの雑誌のバックナンバーにおいてはほとんど経年変化が見られず（あるいはインタビュー調査においても、相対的に日本よりも強固で伝統的な男性性意識が若者層に存在していたことなどと合わせて）、こうした変化の大きさが特徴的であることが明らかになった。

第二に、同じく共時的な比較分析からは、しかしながら、そうした変容は一枚岩的なものというよりグラデーションが存在し、それゆえに、多種多様な雑誌と対応する男性性の複数性が存在することが（とりわけドイツとの比較を通して、日本社会に顕著であることが）明らかになった。この点は図表2や3から伺えるが、総じて言うならば、日本の男性ファッション誌は、おなじ男性向け雑誌であっても、ドイツの男性向け雑誌よりも、日本の女性向け雑誌のほうに近い内容であるということ、またその中でもいくつかの特徴的なジャンルが存在していることが明らかになった。

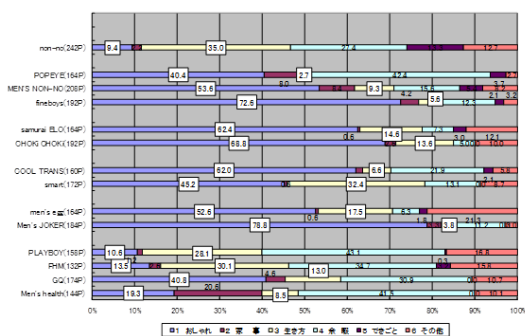
第三に、これらの知見からは、伝統的な男性性を乗り越えた、成熟社会の新たなライフスタイルを構想していくための、大いに意義深い基礎データが構築されたといえる。とりわけ他の社会とは異なった、男性向けの特徴的なメディアが存在することは、この点において資するところが大きいと思われる、さらに今後も研究を深めていくことが期待される。



図表1. 『anan』(上段)『POPEYE』(下段)の表紙の言及分野の時系列比較



図表 2 . 男性ファッション誌の広告の掲載割合 (平成 23 年 8 月号、全頁)



図表 3 . 男性ファッション誌の誌面構成 (平成 23 年 8 月号、全頁)

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

辻 泉 (TSUJI Izumi)

中央大学・文学部・教授

研究者番号 : 00368848

5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

辻 泉

女性ファッション誌の過去・現在・未来 内容分析を中心とする、マルチメソッド・アプローチによる実態把握に向けての試み、人間関係学研究(大妻女子大学人間関係学部紀要)、大妻女子大学人間関係学部、査読無、15号、2014、pp.177-199

https://otsuma.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=5845&file_id=18&file_no=1

〔学会発表〕(計 1 件)

辻 泉・清水一彦

「雑誌を解剖する - 編集者と研究者それぞれの視点から -」、「東京マガジンバンク」セミナー、2014年6月28日、東京都立多摩図書館・東京都多摩教育センター(東京都立川市)

〔図書〕(計 1 件)

藤田結子・成実弘至・辻 泉編、有斐閣、ファッションで社会学する、2016年(予定)、260ページ(予定)